

## 賈島（七七九〜八四二）

## 〔『聞一多全集』第三卷 唐詩雜論〕

牧角 悦子 訳

これは元和・長慶間の詩壇趨勢の中の比較的有力な三つの新勢力の如きものである。かたや老年の孟郊は、そのしわがれて晦渋ながらも突き刺すように鋭い五言詩を唸りながら、世の中と人心とを罵り毒づいていた。この毒づきの中に挟まれていたのが、盧仝と劉叉の「おどけた冗談」と、韓愈が仏道に対して挑戦的に発した大きくて張りのある声種あ張籍・主建ち度で蝨居易の社会改良という錦の御旗の下に、リズムミカルな楽府の調子

に乗せて、彼らの階層の中に潜む病的な小悲劇を、社会に向けて泣きながら訴えていた。その時、遙か遠く、古びた禅房で或いは田舎町の役所で、賈島と姚合とが一群の青年たちを引き連れて詩を書いていた。各人自身の仕官のため、そしてまた嗜好のため、一種陰鬱さを湛えた五言律詩を書いていたのである（陰鬱さは嗜好から生まれたもの、五律は仕官のためであった）。

老年、中年のものは人心を救い社会を改良することに忙しかったが、青年たちは反対に社会人心には関与せず、ひたすら静まり返った片隅に身を潜めて詩を書いていた。この現象は現代の視点から見ると奇妙に映るかもしれない。

しかし実は旧中国の伝統社会の制度の下では普通のことだったのである。と言うのは、前に挙げた二種類の人々のように、既に「名を成す」か、或いは権威ある地位に身を置き、発言したり事をおこなったりする権利と責任を持っているのでないかぎり、そのような功名も縁故も無い青年は、地位の上でも職業の上でも未だ「未青年」期にあるに過ぎず、国家社会に対する様々な崇高な責任は、彼らの肩の上には降りてくるはずも無かったからである。出過ぎた行いは情勢として許されなかった。だからそんなことが身に降り懸かろうなどと考える者は恐らくいなかっただろう。抱負があるが無かるうが、読書人としてその時代に生まれたからには、誰も詩を書かずには済まされなかった。詩を書くことによって始めて、一番上の階層にのぼる階段を進む希望を持つことができる。作った詩が何らかの規格に合致し、また時運にうまく乗ることができ、成り行きに任せて「合格」することができれば、その時少なくとも理論上は初めて社会の中の「成年」と見做され、話をしたり事をおこなったりする資格が与えられる。そうでなければ、仮に作った詩が厳格に定められた規格に及ばなかったり或いは超え過ぎていたりしたなら、また詩作に問題は無くとも時運と合致していなかったとすれば、一生涯詩を書き続けるしかない。自分自身に詩を作る責任を課すか、情感を詩にすることで自らを慰めるかするしかない。賈島はまさにこの古く奇怪な制度の下で犠牲となった、しかしまたその中で熟成した玉の一つであった。このような情勢の下で、もしも彼が孟郊に徹底的に心服したり、或いは白居易の集団にはいったりしなかったことを訝る者がいたとしたら、それは時代の要請が分かかっていないということだ。

賈島と彼のグループが、どうして他の人々が世の救済に忙しくしている時に、自分たちの詩を作ることはかりにまけていたかが、これではつきりしたであろう。しかし、ではなぜ五律だけを作ったのだろうか。これについては再度説明が必要であろう。孟郊らは、議論の便宜のために五言古詩を作った。白居易らは物語を語るために楽府を作った。どちらも自分たちの特殊な目的のためであった。当時の習慣という以外に、各自の特殊な工具を意図して採用し

たと言つてもよい。賈島一派の人々はそんな必要は全く無かった。彼らから見れば、当時のもつとも一般的な体裁が五言律詩であつたというだけで十分だつた。一つには五律は五言八韻の科擧の試験に最も近く、五律を作ることは試験勉強にもなる。二つには景物を描写して一種の情感を浮き立たせるのに、五律は一種の標準的形式であつた。しかし、その詩は何故いつもあの陰霾くもく凜冽つめたく峭硬けわしい情緒に包まれているのか。それが嗜癖によることはすでに述べた。しかしその嗜癖はどのように形成されたのだろうか。その点が最も重要なように思われる。この点をはつきりさせれば、賈島の全貌も明らかになるであろう。

我々は賈島がかつては一度僧無本であつたことを憶えておかねばならない。ある人が前半生において僧侶の生活を送つた場合、一旦還俗したからといってその後半生が全くそれと無関係になつてしまふことは不可能だということを認識しさえすれば、今の賈島が、外見上は儒生であつても、その骨の中にはまだ釈子（仏徒）の部分があることを理解できる。つまり、人生の裏側に属する一切のもの、消極的で、人情の常に逆らつて赴く趣味は、みなその源を早年の禪房での教育背景にたどることができるのである。早年の記憶の中の

坐學白骨塔

坐して白骨の塔を学ぶ

〔贈智郎禪師〕 訳者注、以下同じ

或いは

三更兩鬢幾枝雪

三更 兩鬢 幾枝の雪

一念雙峯四祖心

一念 雙峯 四祖の心

〔一夜座〕

といたつた禅くさは、

獨行潭底影 獨り行かす 潭底の影  
數息樹邊身 數たび息はす 樹辺の身

(〔送無可上人〕)

月落看心次 月落ちて心次を看  
雲生閉目中 雲は閉目の中に生ず

(〔寄華山僧〕)

といたつた詩境の手本となつたばかりか、

瀑布五千仞 瀑布 五千仞  
草堂瀑布邊 草堂 瀑布の邊

(〔送田卓入華山〕)

孤鴻來夜半 孤鴻 夜半に來たり  
積雪在諸峯 積雪 諸峯に在り

(〔寄董武〕)

更には

怪禽啼曠野 怪禽 曠野に啼き

落日恐行人 落日 行人を恐れしむ

(暮過山村)

の源泉となった。彼が直面した時代——終焉に向かいつつある荒涼あれは さびし うつつで寂寞く空虚な、一切が鉛色の色調に覆われていた時代、それはある意味で彼の早年期の記憶の中の色彩と調和し、最後には一致するものであったのだ。この時代の一般的な色調は、彼の早年期の経験に基づけば、先天的なものであり、彼にとっては馴染みであったばかりか、気心の知れたものでさえあったという事ができる。だからこそ彼はこの時代に対して、孟郊のように恨み憤ることも無く、また白居易のように痛み悲しむこともなかった。むしろ反対に彼は一種超然とした境地に立つて、この彼を暖めてくれた記憶を頼りに、それをあたかも一度失って再び取り戻した愛すべきものであるかのよう、細かく観察し、愛撫することができたのである。早年期の経験のおかげで彼は、兇悪なまでに荒んだ「時代相」の前で、怒ることもなく、また心を痛めることも無く、一種の親しみと融和とを感じるだけであった。だから彼は「静」を、「瘦」を、そして「冷」を愛し、これらの情感の象徴——鶴、石、氷雪を愛した。黄昏と秋は伝統的な詩人の愛する時間であり季節である。しかし彼は黄昏よりも深夜を、秋よりも冬を愛した。そして貧と病と、果ては醜悪と恐怖すらをも愛した。彼は

鸚鵡驚寒夜喚人 鸚鵡 寒きに驚き 夜 人を喚ぶ  
(鮑溶「漢宮詞」)

の句が必ず

山雨滴棲鵲

山雨 棲鵲に滴る

(「宿成湘林下」、但し原文は「鵲」を「鴟」に作る。)

よりも人に感慨を覚えさせるとは考えなかったし、また

牛羊識僮僕

牛羊 僮僕を識り

既夕應傳呼

既に夕べなれば伝呼に応ず

(杜甫「返照」)

が

婦吏封宵鑰

婦吏 宵の鑰を封じ

行蛇入古桐

行蛇 古き桐に入る

(「題長江」)

に比べてずっと自然だとは感じなかった。だからと言って彼がこれらの物を愛していたというわけではない。愛だとすれば、それはほとんど病的だといっていいほどの執着だといえる。(早年の禅院での教育によって、執着を絶つ道理について、彼はとうに理解していたに違いないのだ。)彼はただそれらの臭みに親しみを覚えただけだったのだ。それは好奇(普通でないものを好んだ)とすらも言えない。彼は実に、それらのものとあまりに近く、あまりに身近

だったが故に、それらのものを「氣に入」り、好んでそれらに注意を向けただけなのだ。あたかも一つのプリズムのように、日光の中の各種の重層的な色調を、何の主観もなくすんなりと受け入れそして解析したのだ。如何せん「世紀末」の翳は彼に陰りをもたらしたとしてもいたしかたない。だから、彼の最も華やかな色彩ですら

杏園啼百舌 杏園に百舌啼き

誰酔在花傍 誰か酔いて花の傍に在り (二下第)

身事豈能遂 身事 豈に能く遂げん

蘭花又已開 蘭花 又た已に開けり (二病起)

や

柳轉斜陽過水來 柳は転じ斜陽水を過ぎて来る (一題號州三堂吳郎中)

の類に過ぎない。溫馨(やわらかなかぐわしさ)と凄清(すんだつめたさ)とはしばしばない合され、

蘆葦聲兼雨 蘆と葦とは 声 雨を兼ね

菱荷香遶燈 菱と荷とは 香 燈を遶る。 (二雨後宿劉司馬池上、但し原文は「遶」を「遠」に作る。)

春の気配は嚴冬の縁にただよい、

舊房山雪在 旧き房は山雪に在り

春草岳陽生。 春の草は岳陽に生ず。

(二送僧)

彼の眺める「月影」は決まって花の上にはなく、「蒲根(がまの根)」にあり、「棲鳥(ねぐらの鳥)」は緑のやなぎの中でではなく「棕櫚の花の上」にいる。これらの荒涼感<sup>わびさび</sup>は彼の意識と無関係ではありえない。それが極端になると

濕苔糲樹 湿瘦た粘苔は樹の

(一寄魏少府)

という表現までを生む。

以上のような趣味は、過去の詩人が偶然に触れたことはあったが、これほど大量に、そして徹底的に発掘されたことはなかった。様式も手間もこれほど豊富ではなかった。彼が当時の人々に与えたのがどれほど強い刺激だったかを、我々は想像するすべも無い。いや、それは刺激というよりは、一種の深い満足感であつたろう。初唐の華貴さ<sup>けだか</sup>、盛唐の壮麗さ<sup>はなやか</sup>、そして最近の十子の秀媚さ<sup>うつくし</sup>、それにはみな既に飽食し、一種の幻滅感さえ引き起こしかねない。彼らはある清涼感を必要としていた。口直しのために渋み酸味すらをも求めていた。長い年月の熱情と感傷の中で、彼らの感情もまた疲れていた。今、彼らは休息を必要としている。彼らの熟知している禅宗と老荘思想も、こうやって彼らに



道を示した。孟郊や白居易は彼らを鼓舞して更に前進させようとした。しかし、前進しても無駄なことは明らかであった。声尽力果てた彼ら責めることはできない。まして、時には理論的に仏道二家の立場から見ても、彼らは「退」という方法が最も正しいと感じていた。まさにこのような苦悶の中に賈島が登場したのである。彼らは救われた。彼らはまるで新天地を発見したかのごとく驚喜した。実に、この人生の半分の部分、一日の中に夜があり、四季の中に秋冬があるように——その世界をいま垣間見たとして何が悪かろう。ここは確かに理想の休憩地である。感情と思想とをみな眠らせ、感覚器官だけが目を見開き、清涼たる色彩を帯びた地帯を涉猟する。

叩齒坐明月 叩齒して明月に坐し

搢頤望白雲 搢頤して白雲を望む (二過楊道士居)

休息、そして休息。そう、休息だけが疲労を取り除き、氣力を回復させ、次の緊張に向かわせることができる。休息という、この政治思想の中の古くからの方案が、文学の世界の中で始めて賈島によって発見されたと言っても良い。この発見の重要性は、じつに当時、そしてこれ以後、その持った影響力の中から窺い知ることができる。晩唐から五代に至るまで、賈島を倣った詩人は数え上げ切れないほどである。とても少数のはつきりした例外が、詞の意境と詞藻の移動とに向かった以外は、その他の一般の詩人大衆、つまり大多数の詩人たちは、みな賈島に属する。このような観点から見ると、晩唐・五代を賈島時代と呼んでも差し支えないかもしれない<sup>①</sup>。彼がはたしてどこまで崇拜されたかという点、

李洞……は賈長江を酷慕し、遂に銅で賈島の像を写し、それを巾着の中に戴き、常に数珠を持つて賈島仏を念じた。賈島の詩を好む者がいれば、洞は手ずから島の詩を録して贈り、ねんごろに言った。「これは仏典とかわりありません。帰ったらお香をたいて拝むのです。」(『唐才子伝』九)

南唐の孫晟……は賈島の像を描いてこれを部屋の壁に置き、朝な夕なにおつとめした。(『郡齋読書志』十八)

この話を、その時代の人々の神経症の象徴だと解釈してもらってかまわない。しかし賈島の立場から見れば、これが中国の詩人が嘗て受けたことの無い栄誉であることは確かである。杜甫ですら実際この様に偶像化されることはなかった。晩唐・五代の賈島崇拜は彼ら一時代の偏見と衝動だと言われるかもしれない。しかし、ほとんどどの王朝も、その末葉になると賈島をふり返る傾向があるのは何故であろうか。宋末の四靈、明末の鍾譚から清末の同光派に至るまで、みなそうであった。のみならず、宋代の江西派が中国の詩史の上で代表するところの新しい段階は、大部分が賈島の遺産から得られた余剰利益ではなかったか。どの王朝においても、動乱の中の滅亡の前夜には必ず休息が求められ、そしてまた賈島を全面的に受け入れることが求められた。しかし平時においても彼を部分的に取り入れ一種のカンフル剤にしなかったことは無い。賈島は畢竟晩唐・五代の賈島というだけでなく、唐以後の各時代共通の賈島なのである。

原注

⊙ 宋 闕 偈 『深雪偶闕時に喩 麝・顧非熊は、此れを張喬・張蠟・李頻・劉得仁より継ぎ、凡そ晩唐の諸子、皆な紙上において北面す。其の得る所の深淺に随ひて、皆な以つて其の身を終うるも名を後世にのこすに足る。』と。

※ 一九四二年二月十一日 昆明『中央日報』「文芸」副刊 第十八期に發表される。

※ 引用の賈島詩（一）内の題名及び校は『賈島集校注』（齊文榜校注、人民文学出版社 二〇〇一年）に拠る。

